

# 尖閣諸島の法的地位

## —日本領土への編入経緯とその法的権原について (下の一)



尾崎 重義  
(筑波大学名誉教授)

- 1 前書き
- 2 前史—近世琉球と尖閣諸島
  - (1) 尖閣諸島の法的地位
  - (2) 島名考 (以上、前々号)
  - (3) 近世期、尖閣諸島の地位—「(地理的・歴史的に) <sup>ユクン・クバ</sup>琉球の島」という認識の定着
    - I 南蛮海図・和蘭海図の時代 (16世紀から17世紀前半にかけて) (以上、前号)
    - II 「御朱印船航海図」における尖閣諸島 (16世紀末から寛永の鎖国(1635)まで)
    - III オランダ人のいう「日本の湾」—幕府による「日本防衛線」の設定
    - IV 琉球人の作った「那覇・福州間航路図」(以上、本号)
    - V 近世後期 (18世紀～19世紀) の西洋人の探検記・航海記から—まとめ (以下、次号)
- 3 日本領土への編入経緯 (1885～1895) とその法的権原について
  - I 南蛮海図・和蘭海図の時代 (16世紀から17世紀前半にかけて) (前号の続き)
 

1540年代には極東の日本まで到達していたポルトガル人によって、16世紀半ば頃から後半にかけて、台湾から九州西・南部まで続く、南西諸島連鎖がほぼ正確な姿で海図に示されるようになったことは、前号で述べた。ポルトガル人は、16世紀後半には毎年のようにマカオから日本に來航しており、その実地の知見に基づき南西諸島連鎖については

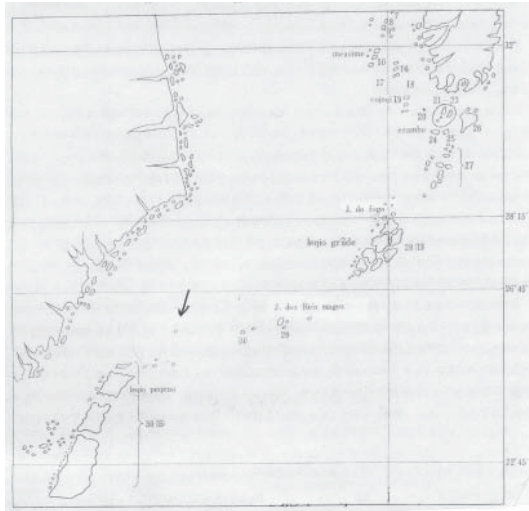
正確に描かれているのである。これに対して、後年のオランダ人も毎年バタヴィアから長崎に向けて交易に出かけるようになるが、彼らの航路は、琉球の島々を島伝いにたどるのではなく、それより西側の、もっと大陸寄りの海域に航路をとり、そこから、長崎沖合の男女群島の女島を目指して直進して長崎港に入るといったコースをとっていたのであり、そのため、南西諸島についての独自の見解をまったく有さなかったのである。そういうことで、オランダ海図 (およびスペイン海図) は、その南西諸島の部分はポルトガルの「Dourado 型」海図の地図表現をそのまま引き継いだものである。

さて、話が前後するが、十六世紀も末になると、ポルトガルが植民地経営上、厳秘していた東アジア海図 (この時期になると「Dourado 型」海図) が国外に流出するようになった。1580年にスペイン国王フェリペ二世がポルトガル王を兼摂したが (人的同君連合)、そのため、ポルトガル海図がまずスペインにもれ、次いで、スペインの属領であったネーデルラント (オランダ) にももれて、転写あるいは作図され、当時印刷業が盛んであった同地において出版されるようにさえなったのである。

本題に戻ると、これら南蛮海図 (ポルトガル・スペイン)、和蘭海図 (オランダ) では、尖閣諸島はどのように扱われているのであろうか。これがここでの主題である。

初期の南蛮海図ポルトガルの「Diogo Homem 型」図には、尖閣諸島は現れていないと断言できる。これに対して、それより少し遅れる「Dourado 型」のポルトガル海図や、それを継承したスペイン海図やオランダ海図には、尖閣諸島と思われる島嶼が登場してくる。「Dourado 型」ポルトガル海図の最も古い Lazaro Luiz 図、1563には尖閣諸島 (魚釣島か) が記されていると見てよい (附図1)。他の海図でも尖閣諸島と思われる島嶼が記されている。(そもそも、台湾島北端を通して日本を目指すのであれば、必ずいつかは尖閣諸島を見かけることになる。) 例えば、Doetsz. 図、1598 (附図2)、「西洋鍼路図」、1598 (附図3) においては、台湾に接してすぐ北東に数個 (いずれも5個) の小島が画かれているが、それは直接に尖閣諸島を指しているのか、あるいは、台湾北端近辺の半架諸島 (棉花嶼、花瓶嶼、彭佳嶼) と尖閣諸島とを一まとめにしたものであるのか不明である。

附図1 Lazaro Luiz 図、1563



出典 中村拓著『鎖国前に南蛮人の作れる日本地図I』（東洋文庫、1966年）178頁

附図2 Doetsz 図、1598



附図3 「西洋鍼路図」(1598)



出典 附図2及び3ともに中村拓著『御朱印船航海図』（原書房、1979年）473頁

この時期の南蛮海図・和蘭海図研究の権威、中村拓博士は、尖閣諸島が記載されていると推測される海図として Doetsz. 図、「西洋鍼路図」の外に、キスベルツ Gijsbertsz.1599 (オランダ)；サンチェス Sances,1623 (スペイン)；ラングレン A.Langren, (1620年代) (オランダ)；コムベルフォド Comberfod, (1640年代) (ポルトガル)；カバリニ Cavallini,1652 (オランダ)；ダメル Damell,1637 (オランダ) の各氏の海図を紹介する。これらの海図では、いずれも尖閣諸島の位置に、3～5個の小島が画かれているが、島名は記されていない。(なお、筆者は Doetsz. 図や「西洋鍼路図」の中の台湾よりすぐ北東にある数個の小島 (5～4島) を尖閣諸島と見ることができれば、リンスホーテン図,1595 (筆者の前稿 (本ジャーナル第4巻1号) の19頁、附図4) の中の台湾と Dos Reys Magos の間に在る3つの小島 (∴と記されている) も尖閣諸島と解釈し得ることを指摘しておく。)

以上、16世紀後半から17世紀前半にかけての西洋人 (ポルトガル人、スペイン人、オランダ人) による日本列島まで至る東アジア航海図には不正確ながら尖閣諸島が現れてきていると判断することができる。それは島名が記されていないし、位置関係も不正確である。(台湾島に近過ぎる。恐らく、半架諸島と尖閣諸島が弁別されておらず、<sup>ひとから</sup>一絡げに扱われたのであろう。また、八重山諸島との位置関係も不正確である。Lazaro Luiz 図 (附図1) のようにもっと北に位置すべきであろう。) しかし、こういった不正確さを考慮に入れても、やはり、この時期の西洋人の航海図に尖閣諸島が描き込まれていることは重要である。そして、それは、何よりもまず、琉球の島として扱われていた (中国大陸沿岸の島としてではない。また、そもそもこの時代の西洋人には、台湾は琉球の南端の島であった。) 台湾から九州南部まで続く南西諸島連鎖に含まれる島として、正しく描かれているのである。

## II 「御朱印船航海図」における尖閣諸島 (16世紀末から寛永の鎖国 (1635) まで)

日本の御朱印船による海外貿易は、豊臣秀吉による天下統一後、積極的に海外進出が行われるようになってから (1592年以降) 徳川幕府がキリシタン排除のため鎖国政策を強行するときまで (1635年) の約40年間活発に行われた。御朱印船とは、秀吉や家康の朱印の押された異国渡海

の特許状(朱印状と呼ばれた)を携帯する貿易船のことで、とくに家康は外国人や西国の大名、そして大商人などに朱印状を発給して、海外貿易を奨励した(山本博文)。山本155すなわち、御朱印船の渡航先である安南(ベトナム)、暹羅(タイ)、呂宋(フィリピン)、東埔塞、高砂(台湾)など東南アジアの諸国に対して、御朱印船には幕府公認の船として通商許可と保護を与え、朱印状を持たない船は海賊とみなして交易を許可しないように求めたのである。かかる奨励策によって御朱印船は、幕府発足直後の慶長9(1604)年から寛永12(1635)年までの32年間に約356隻が海外渡航したと記録されている(村井章介)。

この御朱印船の航海において実際に使用された航海図(「御朱印船航海図」)は、中村拓博士によると、「室町時代末期以後に來日した南蛮人(とくにポルトガル人)から、日本人の航海家や海外冒険家に伝えられたアジア図か東アジア図を原拠

とし、それにすでに日本人が有していた地図知見を加えて編集した日本特有の海図であって、ヨーロッパにも残されていないものである。」この「御朱印船航海図」はポルトガルの「Dourado型」海図やオランダ海図と時期的に重なるが、地名地形ともに、とび抜けて良いものであると評される。御朱印船の寄港地については、**附図4**(御朱印船航海図)を見よ。このうち、後で見るように、呂宋(カガヤン、マニラ)に向かう航路と高砂(タイオワン)に向かう航

附図4 朱印船航路図(太字が寄港都市名)



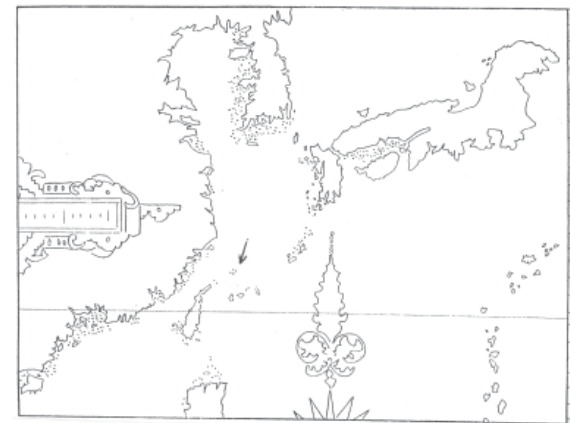
出典 永積洋子『朱印船』(吉川弘文館、2001年)237頁

路が、その往路か帰路において必ず尖閣諸島を通過しているものと見ることが出来る。現在、「御朱印船航路図」は12点残っているとされるが、そのうち以下に掲げる7点の航路図には、尖閣諸島が図示されており、若干のものには島名も記されている。

航路図	対象地域	推定使用年代
(江戸以前)		
1. 池田宣政元侯爵所蔵「航海古図」	アジア図 (アラビア以東)	1592～1598
2. 絲屋随右衛門使用海図(鷹見泉石写)	アジア図 (アラビア以東)	1592～1598 1607以降も使用された。
3. 「紅毛夷海路図」(岡本良知氏所蔵) ( <b>附図5</b> )	アジア図 (アラビア以東)	1592～1598 (江戸末期に写本も)
(江戸時代)		
4. 「東洋諸国航海図」( <b>附図6</b> )	アジア図 (アフリカ東岸以東)	1613～1616
5. 角屋七郎兵衛使用海図( <b>附図7</b> )	東アジア図 (マレー半島以東)	1631～1635
6. 「小加呂多」(東北大学付属図書館所蔵)	東アジア図 (マレー半島以東)	1662年以後の写本
7. 盧高朗草拙旧蔵図(県立長崎図書館所蔵)	東アジア図 (マレー半島以東)	草拙(生年1671～1729)による写本

(中村拓著『御朱印船航海図』第70表に拠る)

附図5 岡本良知氏所蔵『紅毛夷海路図』部分図



出典 中村拓著『御朱印船航海図』(原書房、1979年)39頁